The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中世の花 : 能の花
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1950, 1, p. 18-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中世の花——能の花——

田中裕

一

南北朝末期から室町初期（北山時代）にかけての時期は、後の東山時代と異り、むしろ近世初期に類するやうな特殊な時代精神をあらはしてゐると思はれるが、更にもし中世といふ時代の上限を鎌倉時代におくとすれば、この一時期はその前とも後とも異つた特色のある一性格を形づくつてゐるやうに思はれる。このことを藝術の諸部門にわたつて考察し、類型的な諸樣式としてとり出すことも出來るであらうが、こゝではむしろこの時期に確立された新しい藝能論である能樂論と連歌論とについて、そこに見られる特色ある思想——花のことを考へてみようと思ふ。

能樂論における花の說は、もとより世阿彌の「花伝書」[1400-1402]「花鏡」[1424]を中心に見られるが、連歌論のそれは二條良基の「九州問答」[1376]「連歌十樣」[1379]「十問最秘抄」[1383]等の諸著を中心にして見られるものである。普通世阿彌の能樂論、ことにその幽玄の說は歌論における正徹のそれに比較されるけれども、私は良基に比較する方がむしろ正当と思ふし、花についてはなほさらである。まづ、世阿彌の花の說ははじめの花伝書に殆んど說きつくされてをり、その後といへば花鏡及びそれまでの諸著——「至花道」[1420]「二曲三体絵図」[1421]「能作書」[1424]にそれ〴〵「花」の語の二三が散見するにすぎないことをいつておきたい。おもふに花伝書は、世阿彌の記す通り、父觀阿彌が生前二十余年の間に語り伝へた藝論の大概を錄したものであるとすれば、この書の中心にある花の說が早く父の時に成立してゐたと考へることは自然である。良基の学書に見える花の說がこれに通ふところの多い

のはそのためでもあらうし、両者を比較するにしても年代的な無理はないわけである。

花伝書が「かん要、この道はたゞ花が能の命なる」とまで説いた花とは、もとより一つの比喩であるが、この語は別に「花と面白きと珍らしきと、これ三つは同じ心なり」と注されてゐるので、まさしく面白きもの、珍らしきものと解さねばならない。しかしさういひかへても、これらの言葉は意味も広い上、その指すところも演能の様々な事態にわたつてかなり漠然としてゐるやうに思はれる。

一にはまづ外に表現された形（の面白さ）であり、たとへていへば咲き出たものとしての花である。例へば「思ひ故の物狂」について、「いかにも物思ふ気色を本意にあて、狂ふ所を花にあてゝ心を入れて狂へば、面白き見所も定めてあるべし」とか、「直面の物狂」について、「直面の一大事、物狂の一大事、この二色を一心になして面白き所を花にあて」とあるなど、それと見たい。

次には表現、あるいは表現された形そのものよりも、表現が見る人々の心にあたへる心理的効果をさしてゐる。この用例は殊に多く、この書も又力を盡して説きあかさうとしてゐるところであるが——たとへていへば面白く、珍らしい花ではなくて、花の面白さ、珍らしさとして見られるもの、感じられるものであり、むしろその見られ方、感じられ方に問題はあつた。そのため様々な場合について様々な手段が考へられてゐるわけであり、手段は純粋に藝の錬磨や工夫にむけられると共に、単に観客を眩惑するための工夫、一種の心理的詐術といふべきものにまで及んでゐる。ことに後者は例へば、「人の心に思ひもよらぬ感を催すてだて、これ花なり」の言葉にはつきりと示されてゐるが、あるいは「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず」とか、「花は見る人の心に珍らしきが花なり」とか、「たゞ時に（ソノ時ニ時ソ）用ゆるをもて花と知るべし」等の言葉の示すやうな、観客の意表をつく驚きの効果を期待してゐるのである。この種の面白さはもとより表現そのもの、あるいは藝そのものゝ面白さとは別のものであるが、花伝書も藝の上手と「花を知る」者とは本来異質のものであり、上手にして花を知らぬ者もあれば、未熟にして既に花を知る者もあることを説き、しかも一座建立の棟梁としては上手よりもむしろ花を知る、即ち「能を知る」ことの重要さを力説しさへしてゐるのである。この意味の花は十分興味深いものであるが、すでに考察も盡されてゐて改めていふべきことはない。たゞかゝる花の工夫が異常な関心をもつて語られてゐるところに、能を単に舞台上の藝として扱ふ以上に、舞台と観客とをつなぐもの、眞に劇場的なものとする洞察が働いてゐることをいつておきたい。いひかへればこの花の語によつて、単なる藝能にとゞまらぬ劇場的藝能として確立されつゝあつた能の性格が指摘され、強調されてゐることである。

三は同様に観客にあたへる心理的効果であるが、しかし右のやうな驚きによる面白さではなく、藝の多様さと変化とによる面白さであり、いはゞ咲きかつ散るものとしての花である。「何れの花か散らで残るべき。散る故によりて咲く頃あれは珍らしきなり。能も住する所なきをまづ花と知るべし」といふのはそれであるが、それはあるいは、「もと見し風体なれども物の数を究めぬれば、その数をつくす程久し。久しくて見れば又珍らしきなり」といふやうに常に豊富に曲目を用意して、とりどりに演じ替へること」であり、あるいは「怒れる風体にせんときは柔らかなる心を忘るべからず。（中略）

怒れるに柔らかなる心をもつこと珍らしき理なり。又幽玄の物眞似に強き理を忘るべからず。これ一切舞、はたらき、物眞似、あらゆることに住せぬ理なり」と記されてゐるやうな相反するものゝ共存による凝滯を知らぬ自在な態度でもあつた。更に又「年々去來の花」を說き、「因果の花」を說き、「人々心々の花」を說いたのもいづれも同じ趣意に出るものである。

二

以上のやうな樣々な花のほかに、最後に花は所詮咲きにほふ花の美しさ、主としてその美的內容について捉へられるであらう。これは自明のことゝ見えながら、却つて見すごされてゐる花の意味であり、花伝書の思想なのである。書中隨所に、「花々」、「花やか」、「花めく」等の語が見えるのは、花のもつ一種の美的情調を予想させずにはおかないが、「年來稽古條々」に、「まづ童形なれば何としたるも幽玄なり。声も立つ頃なり。このたよりあれば惡き事は隱れ、善き事はいよ〳〵花めけり」とか、十七八才の能について「まづ声変りぬれば、第一の花らせたり」等とあるのは、花の美しさのもつ特殊な傾きを示唆してゐるやうに思はれる。花伝書に見える花の美しさは殆んどすべてこの種のものであるが、それは童形より三十四五の男盛りに至るまでの肉体の生み出す美しさ、いひかへれば若々しく、新鮮で、浮き立つやうな、感覺的花やかさであつたといつてよいと思ふ。これは花の基調といふべきもので十分强調されてよいのであるが、しかし花はそこに止ることを許されず、この花を地盤として更に遠く展開しようとする。つまり「時分の花、声の花、幽玄の花、かやうの條々は人の目にも見えたれども、そのわざより出でくる花なれば、咲く花の如くなれば又やがて散る時分あり」と考へられることによつて、「たゞ眞の花は咲く道理も散る道理も人のまゝなるべし。さて久しかるべし」といふ「眞の花」の思考に到達する。たしかに花伝書は三十四五までの花のその上に、老境においてもなほ失せぬ眞の花の美しさを見、追求してゐるのであるが、しかしそのため叙上のやうな花の意味が直ちに否定されてゐるわけではない。注意しなければならないことは、こゝではいたづらに老境を高しとする後世の藝道論と異つて、「上るは三十四五までの頃、下るは四十以來なり」といふ判断が前提されてゐることである。むしろからいふ不幸な事実をすなほに承認することによつて、はじめて花を超える眞の花の問題が燃え上り、思索されたのである。肉体と共に成熟し、崩壞する自然の美しさに対して、如何にして搖がぬ美の形を作りうるか。もしそれが出來なければ能とは何であらうか、といふ問に執拗に迫つたのが眞の花の公案であつたといつてよい。前述のやうに、花の一の場合が能のもつ劇場性についての洞察であつたとすれば、これは舞を生命とする能において、その素材となる肉体についての洞察、いひかへれば肉体に則して、しかもその制約をこえる手段を探ることにあつたと思ふ。さて「大方似合ひたる風体を安々と骨を出して、脇の爲手に花をもたせて、あひしらひのやうに少な〳〵とすべし。(中略)何としてもよそ目花なし。もしこの頃までらせざらん花こそ、眞の花にてはあるべけれ」。かういふ花は既にもとの花ではないであらう。それはもう、もとの花であることも出來ないし、あつてはならないといふ意味でさうなのである。いひかへればもとの花は自然に否定されると共に、自覺的にも否定されねばならない。眞の花が「時分の花」、「一旦の花」に対し

て「久しき花」として評價されてゐるのを見れば、それは單にもとの花に代る藝の花ではなくて、更に高次の花として價値づけられてゐたことは明らかである（後述）。それゆゑにこそ眞の花なのであるが、しかしやはりこれも一つの花であつて、両者の間に持続するものゝあることも確かであらう。それは眞の花の成立理由が、失はれる花を如何にして持続させるかといふ熱望と、その手段の発見とに基いてゐたことを考へればよい。それはおのづから自然に対する藝の自覚といふ意味をもつに至るわけであるが、それより前に常に老いの否定、「古様」に対する「花」として追求されてゐるのである。その意味で眞の花は、花の復活であり、蘇つた花なのであつて、両者の形、價値内容は異つてゐても、やはり一つの理想――常に新しく、老いを知らぬ花やかさによつて導かれてゐるのである。「亡父にて候し者は、五十二と申し五月十九日に死去せしが、その月の四日の日、駿河の國浅間の御前にて法樂仕り、その日の猿樂殊に花やかにて、見物の上下一同褒美せしなり。凡そその頃、物数をばはや今の初心にゆづりて、安き所を少な〳〵といろひてせしかども花はいやましに見えしなり」。

以上のやうに、花は若さと老いとによつてその意味を規定されるのであるが、一方鬼に対比されることによつて規定される一面をもつ。鬼とは「まづ本意は強く恐しかるべし。強きと恐しきは面白き心に変れり。抑々鬼の物眞似、大いなる大事あり。よくせんにつけて面白かるまじき道理あり。恐しき所本意なり。恐しき心と面白きとは黒白のちがひなり。されば鬼の面白き所あらん爲手は究めたる上手とも申すべきか。さりながら鬼神をよくせん者は殊更花を知らぬ爲手なるべし。（中略）たゞ鬼の面白からん嗜み、嚴も花の咲かんが如し」。鬼が物眞似の諸体の中で最も能らしからぬものであり、能の本質から最も遠ざかる風体であることは、後に鬼と幽玄とについても触れるであらうが、こゝでは花と対蹠的に語られてゐるのである。それゆゑ花は強く、恐しきものに対して、いはゞ優しく柔和なものといふ意味をもちうるかと思ふ。

このやうに老いあるいは鬼について提出されてゐる花の意味は、しかし美的内容にばかりでなく、既述のやうな心理的技巧としての花の意味にもわたるであらう。例へば嚴に花を咲かす公案を解いて平生幽玄本位とうたはれてゐる爲手の、時に鬼を演ずることと説いてゐるなどそれである。しかしかうした工夫を生み出す根柢には、やはり鬼ならぬもの即ち幽玄への導きとして働く花の意味、審美的に捉へられた花の意味が考へられてゐる筈である。かう考へてくると、花とは常に能を能にする美の規範、いひかへれば能の美的本質とも見られるやうに思はれる。しかし能の美的本質とされてゐるものはいふまでもなく幽玄であつて、こゝに幽玄と花との関係が考へられねばならないであらう。

三

幽玄といふ美的情調が最も日本的なものとして自覚され、歌道から進んで広く藝道一般に及ぶ美的本質として位置づけられ、かつ固定してゆくのは中世であるが、むしろその過程に中世があるといつてもよいほどである。それだけに各時期、藝道の各分野を通じて、幽玄は常に変らぬ一つの意味をもちつゞけながら、同時に又それぞれの場合に即した展開の相をも示してをり、そこに幽玄論の問題もあるわけである。（少くとも新古今時代の幽玄とこの時期、更に東

山時代のそれらを区別することは重要である)

能はもとより二曲(舞、歌)を素材として、幽玄の表現を目的とするもので、他の重要な要素である物眞似といふ演劇性をも、幽玄によつて規制し、舞踊化してゆかうとする方向をとる。從つて幽玄を識ることは能の藝術的性格を識ることであるが、それは如何なる意味内容として捉へられてゐるのであらうか。これについては「花鏡」が、「諸道諸事において幽玄なるをもて上果とせり。殊更当藝において幽玄の風体第一とせり」と說き、ついで「まづ世上の有様をもて人の品々を見るに、公家の御たゝずまひの位高く、人貌世にかはれる御有様、これ幽玄なる位と申すべきやらん。しからばたゞ美しく、柔和なるてい幽玄の本体なり」と說いてゐるのに注意しよう。美しく柔和なるものはまさに幽玄の根本であり、常に変らぬものであつて、能が藝道の伝統思想を正しく継承したことを語るのであるが、しかしそれ以上のことは語らない。が早く花伝書では、「人において女御、更衣、又は遊女、好色、美男、草木には花の類、かやうの数々はその形幽玄のものなり」と記してゐる。こゝに列挙された諸体は、美しく柔和なるものゝ特殊な様態、色彩を示唆してゐるやうに思はれる。むろんこゝで幽玄は、單に素材的に、形として示されてゐるので、幽玄のもつ内面性、その情調の深さをあらはしえない憾みはあるが、しかしかういふ素材的な解說を許すところに、却つて端的に、能が当時概念的に捉へてゐた幽玄の性格をあらはしてゐるとも思はれる。それは感覚的、官能的に華麗なもの、明快なもの、寛潤なもの、新鮮なものであつて、内面性としての幽暗、嚴粛、緊張、靜寂などといふものからかなり遠いものといつてよい。かういひきれば失当もあらうが、美しく柔和なものとしての幽玄の本質が、前に述べたやうな花(眞の花でない)に近づいてゐるとは、花伝書の場合いひうるであらう。しかし更にこのことは、幽玄が幽玄に類するもの、幽玄に対立するものから自己を区別してその本質をあらはさうと試みるとき一層確かめられるやうに思はれる。まづ花伝書は幽玄を「弱さ」――佯りの幽玄から区別する。

「能の品なきをば强きと心得、弱きをば幽玄なりと批判すること誤なり。何と見るも見弱りのせぬ爲手あるべし。これ强きなり。何と見るも花やかなる爲手、これ幽玄なり。」幽玄と弱さとの混同は幽玄論にたえずつきまとつてきた根强い誤解であつて、そのたびにこの種の警告はつゞけられてきたのであるが、こゝでは両者を区別する標識として、また幽玄を眞に特徴づけるものとして花が示されてゐるわけである。幽玄――美しく柔和なるものがとりわけ花であるとすれば、幽玄といふ伝統的情調はなほ「優美」の基調をもちつゞけながら、しかもその美しさにおいて、「花」の性格に即した新しい色彩をあたへられ、花やかな幽玄として蘇つてゐるといはねばならない。

次にこれも幽玄論の定式に從つて、花伝書は幽玄に対して「强さ」を立ててゐるが、しかし両者はいづれも「物の体」にある、いひかへれば素材のもつ固有の性質と考へられ、そのまゝに認めようとされてゐて、すべての素材を幽玄によつて包まうとする態度は十分にあらはれてゐないのである。從つて両者の間に尖鋭な対立も見られないわけで、せいぜい幽玄を規準として素材の撰択を制限するか、あるいはやむなく强さを幽玄に曲げるかに止つてゐるのである。おそらく幽玄が强さと同様に、單に物の体として捉へられてゐる限り、能の本質であるすべてにわたる幽玄の思想は十分発展しえ

ないであらう。つまりそれは幽玄を眞に情調として捉へ、体としての物眞似から区別する思考を前提としてゐるからである。これがあらはれたのは花鏡であつて、花鏡は「何の物眞似に品をかへてなりとも幽玄をば離るべからず。例へば上蔦、下蔦、男女、僧侶、田夫、野人、乞食、非人に至るまで花の枝一房づつかざしたらんを、おし並めて見るが如し。その人の品々は変るとも、美しの花やと見んことは皆同じ花なるべし。この花は人ないなり。姿をよく見するは心なり。（中略）一切悉く物眞似は変るとも、美しく見ゆる一かゝりをもつこと幽玄の種と知るべし」といふのである。「かゝり」の語は良基の連歌論に俄かに多くなり、又それだけ重要視もされてゐる術語で、大凡姿、ことばつゞきの意と解せられるが、こゝもその意に近いであらう。同書は又「上果と申すは姿かゝりの美しきなり。たゞかへすゞ身なりを心得て嗜むべし。（中略）見る姿の数々、聞く姿の数々のおし並めて美しからんをもて幽玄と知るべし」と説いてゐる。こゝで幽玄は物の体の上にあらはれる姿の花である。それは諸体の物眞似の差異をこえて、その上に感受される美しさ、つまり情調的なものでなければならず、それゆゑに幽玄はよく一切の物眞似を包むことが出來たわけである。かやうに幽玄が眞に情調として把握されたこと、しかも人体、言葉、音曲、三体の物眞似のすべてにわたつて具体的に（演技的に）把握されるに至つたことは花鏡のもつ優れた思想であつたと思ふ。同時にこゝでもまさに幽玄は咲き匂ふ一房の花に象徴された美しさであることに注目しなければならない。能樂論の術語をかりて、花伝書のいはゆる物の体としての幽玄をもし「体」とよべば、花鏡のそれは「用」といつてよい。眞の幽玄は体用ともに花なるもの、いひかへれば体の花がそのまゝ用の花として現出したものといはれるであらう。「至花道」はかういふ姿を「一切かゝり」と名づけ、「白鳥花をふくむ、これ幽玄の風姿か」と比喩をとつて断じてゐる。因みに、一切にわたる幽玄を説いた花鏡が、最も強きものとしての「鬼の幽玄」を如何に演技的に解決し、この対立を融和させることが出來たかを記しておかう。「怒れる粧、鬼人などになりて身なりをば少し力動にもつとも、又美しきかゝりを忘れずして動十分心、又強身動宥足踏を心にかけて人ない美しくば、これ鬼の幽玄にてあるべし」。

以上のやうに考へてくると、幽玄は直ちに花であるとも思はれる。たしかに一切かゝりといふ究極の表現形態においては、幽玄はそのまゝ花として感じられるものに外ならなかつたであらう。花鏡の説く通り、幽玄は美しく柔和なるものといふ伝統思想を本質としてもちつゞけながら、しかもその美的内容において、それは直ちに「花」の語で盡しうるやうなものとして理會されてゐるのである。これは能の幽玄のもつ最も個性的なものであるが、又幽玄論の上に加へられた新しい展開の相であつたと思ふ。

四

前に花の美しさについて考へた時、花の上に更に眞の花の美しさのあることにふれたのであるが、それが如何なる内容、境位のものであるか、もう少し辿つておきたいと思ふ。それは既に同じ花伝書が「しほれ」について、「このしほれたると申す事、花よりもなほ上の事にも申しつべし。但花なくてはしほれ所無役なり。さればしめりたるになるべし。花のしほれたらんこそ面白けれ。花咲かぬ草木のしほれたらんは何か面白かるべき。されば花を究めん事一大事

なるに、その上とも申すべきなれば、しほれたる風体かへす〳〵大事なり」と說き進めてゐるところを注意しなければならない。おそらく「花のしほれ」の語に象徵された境位は眞の花――若さの花の次に來るべき段階であり、しかももとの花を超えていやましに匂ふ花――の樣態に外ならないであらう。この語は、もとの花がやはり咲く花のもつ形の鮮明さ、色彩の華麗さで表はされる內容のものであることを示唆すると共に、一方眞の花が遂に形をも色をも崩しつゝ、しかもなほあくまで花であるところに、いひかへれば、もはや見かつ聞くことは難く、わづかに「感」として享受されるやうな花をめざしてゐることを語るのである。幾度注意してもいゝことは、それが單なる花でないと共に、又單なる嗜さでも枯れでもないことであらう。しほれた花ではなくて、花のしほれであり、花は失はれたのではなくてまさに花でありながら、既に花のまゝではない。花伝書は眞の花についてこれ以上に深くは語つてゐない。しかし花鏡になるとこの場合も思索は更に明晰に、力强く展開されてくる。即ち「無心の感」について、「面白き位より上に、心にも覺えずあつといふ事あるべし。これは感なり。これは心にも覺えねば面白しとだにも思はぬ感なり」と說き、「無心の能」について、「二曲も物眞似も切りもさしてなき能の、さび〳〵としたる中に、何とやらん感心のある所あり。これを冷えたる曲とも申すなり」と說く言葉である。これほどの表現をうれば、世阿彌の花の說は、心敬の連歌論、禪竹の能樂論に代表される東山時代の藝能論――最も尖鋭な中世的思考に接してゐることを思はせる。おもふに花伝書の思索は、その後二十余年をへた花鏡においてかなり深く刻み直されてゐるのである。これを便宜上連歌論に対照していへば、大凡花伝書の思索の形は良基の連歌論に並行してゐるが、花鏡は進んで既に心敬に近づいてをり、更に禪竹の諸著に至つて能樂論は再び連歌論と並行するといふことが出來るであらうか。

花の上に叙上のやうな展開が見られるとすれば、同じことは花によつて特徵づけられてゐる幽玄の上にも考へられねばならない筈である。たしかに世阿彌の能樂論の中には、かなり意味の異つたいくつかの用例が見出される。さきに花伝書の中で注意しておいた、眞の花に対する「幽玄の花」などその一つである。それは童形が生得にもつ「身の花」としての幽玄であるから、最も基礎的な風体ではあるが、しかし自然的、素材的な幽玄と見なければならないし、又「五音曲條々」において祝言、幽曲（幽玄）、恋慕、哀傷、闌曲の五音の中、第二等に置かれてゐるそれもまた相対的な幽玄と解されねばならない。おもふに至花道、二曲三体絵図等が詳しく說きあかしてゐるやうに、まづ童形と女体とを幽玄の根本風体と見てこゝに修行の第一階程をおき、他方碎動及び力動の鬼を異端の風体と見なしてこの物眞似を最後の階程に位置づけることは能樂論の基礎構造であるが、しかし花鏡がすべてにわたる幽玄を說き、鬼の幽玄に及んだやうに、これら位層を異にする諸風体はすべて究極は幽玄によつて包まれ、秩序づけられねばならなかつた。それゆゑ一体としての幽玄と、全体にわたる幽玄との別が生じ、その間に價値の等差が成り立つわけであるが、全体にわたる幽玄とはいひかへれば鬼に媒介された高次の幽玄でなければならないであらう。しかし幽玄に鬼、あるいは强さが媒介されるとは具体的には如何なる修行の課程が辿られることであらうか。これを說いたのが「九位次第」に整理された諸課程の中、特に「中初上中下後」の三段階說であり、向去却來の

思想である。さきの祝言、幽曲から闌曲に至る價値段階は、この幽玄から強さへと向ふ三段階説に対応するものに外ならない。即ち五音曲條々は闌曲を釈いて、「歌道にも十体の中に強き位をいふに、鬼を取りひしぐなど申すはこの位にてやあるべき。これは向去却來していや闌けて謠ふ位曲なり」と記してゐるのである。同書は又闌曲の姿を草木にたとへて杉木にあて、幽曲の姿を櫻木にあてゝゐるが、さきに花伝書が幽玄をたとへて、「草木には花の類」といひ、「草木にも松杉、かやうの数々の類は強きものと申すべきか」と記してゐたのを考へ合はすことが出來る。

以上の諸著はいづれも、美しく柔和なものとしての幽玄が、やがてその対極である強さを透過してゆく方向を語り、そこに至上の藝位を置かうとしてゐるのであるが、花鏡はこれを「妙所」といひあらはしてゐる。「妙所は能を究め、堪能そのものになりて、闌けたる位の安き所に入部して、なす所のわざに少しもかゝはらで、無心無風の位に至る見風、妙所に近き所にてやあるべき。凡そ幽玄風体の闌けたらん、この妙所に少し近き風にてやあるべき。」こゝには幽玄、闌位、妙所の関聯を通して、幽玄の最も深い理會と境位とが語られてゐると思ふ。闌位、更にそれが志向する妙所とよばれる境位は幽玄の極であり、花でいへば眞の花の究まれる美しさであらうが、同時にそれは花のもつ他の一つの意味、驚きの効果においても又最高の花であつた。至花道が闌位を語つて、「上手にはよき風のみならではなし。さる程によき所珍らしからで見風も少し目なるゝ樣なる所に非風を稀に交ふれば、上手のためにはこれ又珍らしき手なり。さる程に非風かへて是風になる遠見あり。これは上手の風力をもて非を是に化かす見体也。されば面白き風体をもなせり」とあるのはこれである。おもふに闌位は花のあくなき要請に対して、はじめてよくこれを満しうる位であり、まことに十分な意味で眞の花であつた。

（追記）この稿は能の花と連歌の花との考察を通して、中世の花の思想を明らかにしようとするものであるが、紙数の都合上、後半は次回に書いて首尾を全うしたいと思ふ。